

巻 頭 言

部長教授 杉原弘人

この巻頭言を書くために、踏査の創刊号を読んだ。創刊号は探検部が設立されて、3年目の昭和36年に発刊されている。表紙をあけると、当時学長であった矢口孝次郎先生が『探検の意義』と題して次のように書かれている。「真の探検は単なる冒険ではない。それは広い知識と周到なる計画に支えられて、はじめて行いうるものである。近代世界を生み出した精神の一つは、未知の世界の克服というルネサンスの精神であるといわれるが、それは単に地理的にみた未知の世界の克服だけを意味するのではなく、学問の世界にも芸術の世界にも共通に表われた精神であった。現代におけるいわゆる探検も同じように、広い人間生活とのつながりをもって行われることによって、はじめて真の意義をもつものとなるのである。」その創刊号の編集後記をみると、発足以来3年、部外への総合的な活動の発表としては初めての試みであり、未来へ前進するための一つの足がかりの様なものができた様に思うと書いている。

探検部は矢口先生の『探検の意義』をよく理解し、国内で、海外で有意義な探検活動をつづけ、今年で創設23年を迎えた。

探検は昔は探険と書いたという。険を探索、未知の世界を踏査するのが探険であり、探険と探検の違いは探険は探り調べることで、学問的に未知の世界を探索することを通じ、人間が未知の自然と社会に対して、いかに不屈の精神をもって探究できるか、その可能性を見きわめるための試みであると、長沢和俊（探検学の著者）は述べている。

ノルウェーの極地探検家アムンゼンは北西航路を完成し、ベーリング海峡に達する探検に成功し、また、犬ぞりにより初めて南極に足跡を残すなど、極地の探検調査を行なった人であるが、アムンゼ

ンは探検家の条件を次のように述べている「探検家としての第1の資格はまず強健にして、よく練磨された身体を持ち主でなければならない。探検には肉体的に最大の困苦が伴い、かつそれは長期にわたって困苦に耐え忍ぶ力と、また、瞬間的な危機を切り抜けられる力とを兼ね備えていなければならない。第2に重要なのは心の準備であり過去の探検で経験されたすべての事柄に通曉するということである。探検家の知的準備としては、その探検の成果が必然的に解決の鍵となるような学術的ないろいろな問題について充分の理解を持っているなければならない。また、各種科学機械の使用法に習熟しておらなければならない。」

アムンゼンの探検家の条件はクラブ活動として、探検活動をしている部員諸君には少し過重であるが、傾聴に値するものがあると考ええる。

昭和60年（1985年）は関西大学の創立100周年である。昭和40年（1965年）、創立80周年記念事業として、ペルー・アンデス学術調査隊が南米に派遣されて以来、大学の事業としての海外遠征は今までない。

部員、OB諸君と私たちで、100周年記念事業に相応しい大調査隊を派遣したいものである。

今年は冷夏で、探検部の活動には適しない日々であったが、知床一周踏査、釧路内海一周ヨットトレーニングなど多彩な活動を終え、来年度のヒマラヤ・ダンブッシュピーク遠征の準備を開始しているときいている。無事故探検部の名声を維持するとともに2年後にくる探検部創設25周年にむけて現役、OB、私たちが一体となって、関西大学探検部の発展に努めようではないか。

（社会学部教授）